

## メタファー理解における文脈生成とあいまい性耐性の影響についての研究

西村, 佐彩子  
九州大学大学院人間環境学府(西村)

北山, 修  
九州大学大学院人間環境学研究院 : 教授(北山)

<https://doi.org/10.15017/853>

---

出版情報 : 九州大学心理学研究. 2, pp.107-116, 2001-03-31. 九州大学大学院人間環境学研究院  
バージョン :  
権利関係 :

# メタファー理解における文脈生成と あいまい性耐性の影響についての研究

西村佐彩子 九州大学大学院人間環境学府  
北山 修 九州大学大学院人間環境学研究院

## The effect of context production and ambiguity tolerance on understanding of metaphor

Sayako Nishimura (*Graduate school of human-environment studies, Kyushu university*)

Osamu Kitayama (*Faculty of human-environment studies, Kyushu university*)

The purpose of this study is examination of metaphor understanding. According to Relevance theory, verbal communication is carried out by selecting in most relevance context. When the context is not presented, the more context product, the more understanding promote. In research 1, I defined property abstraction and context situation production as context production ability. I examined to how this ability effect on understanding of metaphor. As the result, ability of context production is specially important in unfamiliarity metaphor. In research 2, judging from ambiguity tolerance as feature of obsessive compulsive personality who is taken a view of personality to have low appetency of metaphor. I examined to how they are apt to make a context production in a double meaning language. As the result, the more they denial ambiguity, the more they make context production literally. When we make a process of metaphor understanding clear, we examine not only presented context, but also process of audience's relevance achievement. And we need to examine personal property to have a effect on achievement of relevance.

**Keywords:** metaphor, relevance theory, context production, ambiguity tolerance

## 問 題

言葉によるコミュニケーション場面において、話し手と聞き手の間に生じるずれの問題は常につきまってくるだろう。さまざまな言語表現のうちには、字義どおりの内容以外のものを伝達する非字義的な表現も存在する。非字義的言語 (nonliteral language) の代表としてメタファー (metaphor) やアイロニー (irony) といった表現があげられる。これら非字義的言語は言葉のもつあいまい性をより反映していると考えられ、言葉のもつあいまい性を考えていく上で恰好の材料となるだろう。そこで本研究ではあいまいな表現を代表するメタファーを材料に用い、メタファーの理解の個人差を検討していくことで言葉の理解のされ方を明らかにしていくことを目的とする。

メタファーは芳賀 (1990) によると、狭義では隠喩、広義ではある事柄を表現するのにそのことが何らかの関係のある事柄に例えて表現する働きと定義されており、比喩に近いだろう。従来メタファーのような非字義的表現は Grice (1975) に代表される、すべての言語伝達の本質である協調の原理 (cooperative principle) の中の質の格率 (maxims of quality) の違反の例であり、修辭的な追加レベルの言語能力であるとされてきた。メタファーは文字通りではない表現であることから、「あなたが虚

偽であると信じているものと言ってはならない」という質の原則を一見違反している。しかし話し手は真実を提供することが予測されるので、含意されている比喩的な意味を意図しているという推論によって解釈されるといふ説明がされてきた。このようにメタファーなどの文彩的表現は例外的な表現であるとされてきた。

それに対し、Sperber & Wilson (1986) はすべての格率は関連性の格率にまとめることができるのではないかと指摘し、関連性理論 (Relevance theory) を提唱した。つまり、言語伝達において人はより少ない処理能力 (processing effort) でより大きな文脈効果 (contextual effect)、すなわち関連性を達成しようとするという関連性の原則に従うというのである。Sperber & Wilson は、メタファーと字義的な発話は1つの連続体であり、包括的な言語伝達の理論によって説明できると主張している。最適な関連性が達成されることが重要であるのだから、最も関連性の高い表現が字義性の高いものである必要はない。必要な文脈効果を果たす上で処理労力が少なくなるようにした結果、メタファーのような字義性の低い表現になることは十分ありえるのである。またメタファーには翻訳不可能性があり、かなり標準化されたメタファーでも言い換えると必ず何かが失われることになると説明している。そこで本研究では関連性理論の立場に立ち、

メタファーを文字通りの言葉の延長上にあるものにとらえることにする。

ところで全く同じ表現でも、聞き手によって異なった理解がされる場合がある。その要因として、メタファーの理解には文脈と話し手の意図の推測が影響を及ぼしていることが指摘されてきた。文脈 (context) は広義では周囲の環境すべてが文脈であり、狭義では直前に提示されたもののみを文脈として扱っており、その定義はそれぞれの研究によって異なっている (子安, 1990)。今までのメタファー研究の多くは実験者により提示された文脈を文脈として定義しているものが多かった (Ortony et al., 1978; Gildea & Glucksberg, 1983; Blasco & Briihl, 1997)。これらの研究では、適切な文脈を提示することがメタファーの理解を促進すると報告されている。メタファー研究では、同じメタファーでも理解のしやすさに違いが生じたり異なった理解がされる要因として、与えられた情報、つまり状況要因によって生じる差に焦点があてられやすく、メタファーが理解される一般的な傾向を明らかにしてきたといえるだろう。確かに文脈の存在が理解の差異に及ぼす影響は大きい。しかし、同じだけの情報が文脈として与えられ、一見全く同じ文脈に見えても、理解のされ方に個人差が生じる。それには一体どんな要因が影響しているのかを考えてみることにする。

Sperber & Wilson は、伝達の成功の保証をするわけではないモデルとして関連性理論を定義している。つまり話し手が伝えようとした本質が聞き手に共有されることは保証されておらず、個人にとっての最適な関連性の達成は異なるため、理解に個人差が生じると考えられる。

今まで、相互知識 (mutual knowledge; Schiffer, 1972) によって文脈は作られると考えられてきた。相互知識は、聞き手が話し手の意図した通りの解釈を復元するためには、文脈解釈に用いられる文脈情報はすべて相互に知っている知識でなければいけないとしている。

しかし Sperber & Wilson は、話し手と聞き手が同じ知識を共有するためには無限の時間を要するため、日常の伝達がうまくいくのは話し手と聞き手があらかじめ相互知識を確立しているからではなく、聞き手がその理解においてあらゆる種類の仮定や推量を駆使するからであると説明している。つまり、関連性理論によると文脈はそこにある (聞き手が持っている) ものではなく聞き手によって最も関連性の高い文脈が選ばれているということになる。関連性の達成が失敗すると理解は失敗し伝達は失敗に終わることになる。最大の関連性がいかに得られるかを見積もることがその人の認知行為に影響を与え

るのでと考えられている。そこで本研究では関連性理論にそって、文脈を多くの顕在的潜在的情報の中から聞き手が選んだものとして定義する。

関連性理論にそって考えると、提示された文脈がない場合は聞き手がどのような文脈を推測し作っているかが個人差に影響すると考えられるのではないだろうか。そこで実験条件としての情報を何も与えられないで選択できた文脈を、聞き手である被験者が文脈生成したととらえ、それを本研究では文脈生成能力<sup>1)</sup>と定義することにす。文脈選択において、聞き手の知識上思いつけないような連鎖は起こりえないし、関連性の原則に合わない解釈は選ばれない (大浜, 1996)。すなわち文脈生成されたものは、その個人が関連性の達成をしたものとみなせるだろう。文脈生成能力が高いと関連性を達成しやすくなりメタファー、ひいては言葉を理解しやすくなるのではないかと考えられる。

そこで本研究では文脈生成能力に関与すると予測される以下の2つを、関連性を達成しやすくし理解を促進させる要因として取り上げることにする。

<属性抽出能力>類包含理論 (Glucksberg & Keysar, 1990; Glucksberg et al., 1997) によると、喩辞から概念の属性が活性化され、被喩辞によって制限を受ける過程でメタファーは理解される。選択され抽出された喩辞の特徴は文脈として使用されると考えられる。

<文脈状況生成能力>提示された文脈のないメタファーが実際使われる状況を想像できる人ほど、利用できる文脈を選択していきやすく、関連性を達成していきやすいだろう。

個人が文脈生成したものをその個人にとって最も関連性が高い情報とみなし、どのように文脈生成をしていけるかを関連性の達成しやすさを測る1指標としてとらえ、メタファー理解に及ぼす影響を検討していくことを1つめの目的とする。

ところで関連性の達成の仕方に影響する要因にはどのようなものが考えられるだろうか。そこでメタファーの特徴であるあいまい性との関わり方が特徴的なパーソナリティの代表的なものである強迫パーソナリティを用いて個人特性が文脈生成に及ぼす影響を検討する。Salzman (1968) は、強迫パーソナリティとは今日最もよく見られる性格タイプであるとしており、その極端なものが精神科患者の中に見られるわけだが、強迫パーソナリティは多かれ少なかれ誰でも持っている性格特性であると考えられる。強迫性格者は、支配したい、すっきりしたい、動かしたい、などの「思い通りにしたい」という願望と、それが可能であるという万能感をもつが、一方で願望の実現が不可能と知りつつ万能感の挫折を回復させようとして、不確かさ、あいまいさ、予測不可能性などを儀式的に取り消そうとする (心理臨床大辞典 p

<sup>1)</sup> 能力という言葉を用いているが、理解力の能力よりも関連性を達成していく能力である。そもそも関連性理論の立場に立つと、関連性の達成は個人によって異なるのだから完全な理解というのは個人によって異なると考えられる。

697)。

強迫パーソナリティ者が打ち消そうとするあいまいさ (Ambiguity) であるが、北山 (1988) によると、あいまいには現象的に「どのようにもとれない (undetermined)」ということが第一義にあり、二つ以上の意味にとれるというのはその「いかがわしさ」を嫌って何とか複数の意味にとって処理しようとする<割り切りたい>という消化優先の結果である場合が多いという。メタファーは文字通りの意味と比喩的な意味の2つの意味を持ち、両義性を代表する表現であるといえるだろう。強迫パーソナリティをもつ人にとって、メタファーのもつあいまいさに耐えられず、理解を拒否してしまうことが考えられる。強迫者のこのあいまいなものを打ち消そうとする認知の特徴は、脅威の源としてあいまいな状況を知覚する (Budner, 1962) というあいまい性非耐性の概念で説明できるだろう。強迫パーソナリティのメタファーの理解に非寛容であるという認知スタイルの特徴を検討していく上で、最も顕著な特性はあいまい性耐性によってみれるのではないかと考えられる。あいまい性耐性とは、刺激あるいは事態の特徴を ambiguity という側面からとらえ、それに対する反応の相違を認知の基本的な個人差とみなすものである (今川, 1981)。Frenkel Brunswik (1949) によると、「価値判断に関して、白黒はっきりさせるという解決手段に頼り、早急で未成熟な結論に達し、ときとして現実の無視に至り、総体的に、絶対的で明確な他人への承認や拒絶を求めようとする傾向」と定義されている。衛藤 (1993) は事例研究から、強迫症状の症例において生育歴の中にあいまい性非耐性の萌芽が見られ、症状の体験様式、対処行動の中にあいまい性非耐性を確認できたとしている。

関連性理論の観点から考えてみると、強迫パーソナリティを持つ人がメタファーを受け入れにくいということは、強迫パーソナリティ特有の関連性達成の特徴があるのではないかと推測できる。つまり、強迫者のあいまいなものを割り切ろうとする特徴は、強迫者特有の関連性の達成の仕方ではないかと考えられる。強迫者のメタファー理解の特徴は、メタファーを理解する時の、関連性の達成の動機付けの低さと関係しているのかもしれない。あいまいなものが居心地の悪い強迫者にとって、あいまいなものをあいまいなままおいておかずにかけて理解することが最も関連性の高い手段なのではないだろうか。

以上より、本研究の目的は大きく2つにわけられる。まず研究1ではメタファーの理解は提示された文脈によるのではなく関連性が達成され選ばれた文脈によることを示し、それが理解の個人差を生み出すということへの1つの示唆とする。そして研究2では強迫パーソナリティのメタファー理解の特徴を示した上で、パーソナリティ

が関連性の達成の仕方に及ぼす影響を考察する。

## 研究 1

「AはBだ」という提示された文脈のない隠喩形式のメタファーを材料に用いて、メタファーが提示されたときにどれだけ積極的に関連性を達成しやすいかによって理解度に違いが生じてくるのではないかとすることを文脈生成能力の観点から検討する。以降Aを被喩辞、Bを喩辞と表記する。文脈生成能力が高いほど関連性が達成しやすくメタファーを理解しやすいと考えられる。そこでまずどれだけ文脈生成を行うことができる人なのかという文脈生成能力の個人差がメタファーの理解に及ぼす影響をみる。次に状況生成の質的な側面も考慮しながらあるメタファーについてどのような文脈生成を行ったかという理解の過程に焦点をあて、文脈生成がメタファー理解にどのように影響するかを検討する。

文脈状況生成は、メタファー提示後状況生成を行ってもらい、状況生成がメタファー理解に及ぼす影響を検討する。属性抽出は、類包含理論ではまず喩辞の属性の活性化から始まるとされることから、メタファー提示より先により制限のない状態で属性のイメージを活性化させ、文脈生成がメタファー理解に及ぼす影響を検討する。そして両者の関係がメタファーの理解にどう影響していくのかを見ていく。その際メタファーの喩辞、被喩辞間の共有特徴顕著性の増加は理解容易度を高め、示差特徴顕著性は理解容易度を低めるがおもしろさを高める (楠見, 1985) ということから、解釈のしやすさとおもしろく感じるかは別ではないかと考えられるため、その2点から理解のされ方を検討する。

またメタファーの種類によって文脈生成能力の影響が異なってくることも考えられる。メタファーには理解しやすいものもあれば理解が困難な独創的なメタファーもあると考えられる。関連性理論では聞き手の文脈選択が自由になるほど聞き手の責任が大きくなり、詩的效果や独創性が高まるとされている。わかりやすいメタファーは型どおりの文脈で処理されることが多いと考えられるが、わかりにくいメタファーは聞き手の責任が大きくなる状態と考えられる。そのためわかりにくいメタファーほど文脈生成能力が重要なのではないかと考えられる。Blasko & Connine (1993) は、熟知度 (Familiarity) の高いメタファーは文字通りの文と同程度に理解されることを示している。わかりやすいメタファーは慣習化された部分もあり、この2つの文脈生成能力によって関連性を達成できなくても、他の手段で関連性が達成しやすいだろうと考えられ、比較的文脈生成の影響が小さいのではないかと思われる。

Table 1  
文脈生成能力の条件ごとの意味評定の平均値

		状 況		
		2 場面	1 場面	0 場面
わかりやすい比喩	属性高群	4.64 (0.49)	4.21 (0.97)	3.85 (1.34)
	属性低群	4.28 (0.71)	4.60 (0.51)	3.85 (1.06)
わかりにくい比喩	属性高群	3.58 (0.87)	3.42 (1.28)	2.57 (1.71)
	属性低群	3.57 (1.07)	2.00 (0.66)	3.00 (1.15)

( )は標準偏差

## 方 法

**被験者** 大学生77名。平均年齢は20.8歳であった。

**実験計画** 文脈生成能力について、3（文脈状況生成能力）×2（属性抽出能力）×2（メタファーの種類）の被験者間×被験者間×被験者内計画。文脈生成過程について、わかりやすいメタファー、わかりにくいメタファーごとに2（属性抽出）×3（文脈状況生成の質）の被験者間計画で行った。

**材 料** 材料として用いる理解が容易なメタファーと理解が困難なメタファーを選択するため大学生及び大学院生26名を対象に予備調査を行った。その結果をもとに「母親は海だ」「母親は糸だ」をわかりやすい比喩とわかりにくい比喩として用いた。

質問紙は以下の内容で構成されていた。

I 喩辞である海、糸に2単語を加え、それについて単語（形容詞、名詞、動詞など）で属性の活性化を行う。

### II メタファーの質問紙

「AはBだ」という形式のメタファーの提示。

①文脈状況生成「母親はBだ」がどのような状況で使われるかを具体的に想像してもらい、思いつく状況があれば「母親はBだ」という表現が含まれている文章を1つ作成し記述する。

②意味評定（意味がとおる文だと思うか）

③おもしろさ評定（おもしろい表現だと思うか）

④メタファーの意味記述を参考のために行った。

I およびIIの①はメタファーにふれた時にどの程度文脈生成をしやすいかという文脈生成能力を測るために用意された。②の意味評定はメタファーをどれだけ意味があるものとしてとらえたかを、③のおもしろさ評定はどれだけおもしろいものとしてとらえたかを測るために用意され、非常に意味がないから非常に意味がある、非常につまらないから非常におもしろい、のそれぞれ5件法

で評定を求めた。

**手続き** 質問紙は集団で行われた。被験者はまず最初にIの質問紙について各単語につき1分ずつ、イメージする単語を質問紙に印刷された枠内にあげていく課題を行った。その後被験者ペースで1ページに1つ計2種類のメタファーについての質問紙を記述、評定した。その際記述項目については思いつかなければ斜線をして次に進むように教示された。メタファーの提示順序は冊子ごとにカウンターバランスを行った。

## 結果と考察

### 分析1 <文脈生成能力の影響>

各文脈生成能力を以下のように計算して被験者を群分けした。

属性抽出能力については、記述された1属性を1点として各単語ごとに得点を加算し標準得点を求め、4単語の標準得点を加算し得点とした。そして属性抽出能力得点が高い順に、高群、低群の2群に被験者を振り分けた。文脈状況生成能力については、2つのメタファーのうち何場面の状況を生成できたかにより2場面群、1場面群、0場面群に群分けした。

意味評定とおもしろさ評定を従属変数とし、意味評定では全く意味がないを1点、非常に意味があるを5点とし、おもしろさ評定では非常につまらないを1点、非常におもしろいを5点とした。

Table 1に各条件ごとの意味評定、Table 2におもしろさ評定の平均値を示した。

意味評定、おもしろさ評定を従属変数として、3（文脈状況生成能力：2場面、1場面、0場面）×2（属性抽出能力：高群、低群）×2（メタファー：わかりやすい、わかりにくい）の被験者間×被験者間×被験者内計画で分散分析を行った<sup>2)</sup>。主な結果として、意味評定では状況と属性とメタファーの2次の交互作用が見られた(F(2,75)=8.14, p<.01)。下位検定を行った結果、わかりに

<sup>2)</sup> 本来評定法は順序尺度であり分散分析を用いて検定を行うことはできないが、本研究では便宜上分散分析を用いた。

**Table 2**  
文脈生成能力の条件ごとのおもしろさ評定の平均値

		状 況		
		2 場面	1 場面	0 場面
わかりやすい比喻	属性高群	3.64 (0.86)	3.35 (1.27)	2.57 (1.13)
	属性低群	3.57 (1.07)	4.30 (0.67)	3.28 (1.60)
わかりにくい比喻	属性高群	3.94 (1.08)	3.42 (1.28)	2.85 (1.57)
	属性低群	3.00 (1.18)	2.90 (0.87)	3.00 (1.29)

( )は標準偏差

くいメタファー条件において状況の単純主効果( $F(2,75)=6.61, p<.01$ )と属性 $\times$ 状況の単純交互作用( $F(2,75)=4.97, p<.05$ )が見られ、2場面群0場面群においては属性群間の有意差は見られなかったが、1場面群では属性高群の方が有意に意味評定が高かった( $F(1,22)=11.90, p<.01$ )。すなわち状況を多く作っていける人と全く作れない人は属性の活性化はあまり関係がないが、中程度に状況を作っていける人にとって、どれだけイメージをふくらませることができるかがわかりにくいメタファーの意味理解に大きく関わってくるといえる。またおもしろさ評定では属性とメタファーの交互作用が見られ( $F(2,75)=7.56, p<.01$ )、低群においてメタファーの単純主効果が見られた( $F(1,37)=12.43, p<.01$ )。すなわち属性を多く活性化していける人はどちらのメタファーも同程度におもしろいと感じるが、属性を活性化できない人は、わかりやすいメタファーの方がおもしろいと感じるということを示している。

#### 分析2 <文脈生成過程の影響>

各メタファーごとに行われた文脈生成を以下のように群分けした。属性抽出については、海と糸それぞれごとに得点を加算した属性抽出得点が高い順に、高群、低群の2群に被験者を振り分けた。文脈状況生成については、「母親は海だ」「母親は糸だ」それぞれごとに質的な視点から、状況が具体的な場面を書けているもの(具体群)、抽象的な一般的状況や説明的文脈の中で用いられているもの(抽象群)、状況が書けていないもの(なし群)の3群に分けた。

Table 3にわかりやすいメタファーの、Table 4にわかりにくいメタファーの条件ごとの意味評定およびおもしろさ評定の平均値を示した。

メタファーの種類ごとに、意味評定、おもしろさ評定を従属変数として2(属性抽出能力：高群、低群) $\times$ 3(文脈状況生成能力：具体群、抽象群、なし群)の分散分析を行った。

その結果、わかりやすいメタファーでは、意味評定、おもしろさ評定とも文脈状況生成能力の主効果のみ有意であった( $F(2,70)=8.26, p<.01$ ;  $F(2,70)=6.68, p<.01$ )。すなわち状況を生成できた方が意味がありおもしろいととらえやすかった。しかし属性活性化が理解に及ぼす影響は少ないと考えられる。

またわかりにくいメタファーでは、意味評定のみ、状況の主効果が有意であり( $F(2,70)=7.22, p<.01$ )なし群と抽象群が1%水準で、なし群と具体群が5%水準で有意差が見られ、また属性の主効果が有意であり( $F(1,70)=5.76, p<.05$ )、文脈を生成できた方が、また属性を活性化できた方が意味があると評定した。状況と属性の交互作用も有意であった( $F(2,70)=3.96, p<.05$ )。下位検定の結果、属性低群では状況の単純主効果が見られ( $F(2,39)=9.81, p<.01$ )、多重比較(TukeyのHSD)の結果なし群と抽象群が5%水準で、なし群と具体群が1%水準で有意差が見られた。つまり属性活性化ができた場合は状況を生成できるかによって有意な差は見られないが、属性活性化ができなかった場合は具体的な状況をつくれるほど理解が高まることを示している。また状況なし群、抽象群において属性の単純主効果が見られたが( $F(1,30)=5.11, p<.05$ ;  $F(1,21)=8.49, p<.01$ )具体群においては見られず、具体的な状況を作れた場合には属性活性化の量はあまり理解に影響しないことも示された。

これらの結果は、わかりやすいメタファーでも状況生成が理解を促進させるが、わかりにくいメタファーにおいてより文脈生成の効果が顕著に表れていることを示している。

意味理解は状況生成ができるほど促進される傾向があるだろう。その上で具体的な状況を生成できなかった時に属性が活性化された効果が生じてくるように、状況生成と属性抽出の兼ね合いによってわかりにくいメタファーの意味が理解されることが示された。

またおもしろさ評定については属性抽出能力の影響が

**Table 3**  
わかりやすいメタファーにおける文脈生成の条件ごとの各項目評定の平均値

		状 況		
		具体群	抽象群	なし群
意 味	属性高群	5.00 (0.00)	4.38 (0.50)	3.81 (1.07)
	属性低群	4.41 (0.90)	4.55 (0.51)	3.66 (1.22)
おもしろさ	属性高群	4.00 (1.09)	3.55 (0.78)	2.81 (1.25)
	属性低群	4.08 (0.90)	3.75 (1.01)	2.77 (1.56)

( )は標準偏差

**Table 4**  
わかりにくいメタファーにおける文脈生成の条件ごとの各項目評定の平均値

		状 況		
		具体群	抽象群	なし群
意 味	属性高群	3.30 (1.15)	4.20 (0.63)	3.21 (1.42)
	属性低群	3.81 (0.75)	3.15 (0.98)	2.22 (1.06)
おもしろさ	属性高群	3.50 (1.17)	3.80 (1.13)	3.21 (1.42)
	属性低群	3.36 (1.20)	3.30 (1.31)	2.77 (1.06)

( )は標準偏差

強く現れた。イメージをふくらませることができる人は、喩辞のいろんな側面に気づき、新奇なメタファーをおもしろくとらえることができるのではないかと考えられる。すなわちそのメタファーについての属性を活性化できたかよりも、個人特性によるところが大きいといえるだろう。

以上の結果は、文脈生成能力が高い人の方がメタファーを理解しやすく、かつ、わかりにくいメタファーは選択できる文脈の幅が広がるため独創的で聞き手の責任が強くなり、文脈生成のされ方によって理解のされ方に差異が生じやすいという仮説を支持している。意味理解では状況生成の影響を属性抽出が補っていくが、おもしろいものとしてとらえられるかには属性抽出能力が強く関わっているのではないかと推測できる。

## 研究 2

研究1では文脈生成の仕方によってメタファーの理解のされ方が異なってくることが示された。そこで強迫者のメタファー理解の特徴を明らかにした上で、文脈生成

の特徴を示唆することを目的とする。

研究1では、材料としてメタファーとしてしか理解できないものを用いた。このような材料はメタファーとしての理解に失敗してしまうと、文字通りには偽の文になってしまう理解できない文になってしまう。強迫者がメタファー理解に失敗してしまうことは万能感を脅かすことにつながり、不安が喚起されて、自分が理解できない状況があることに耐えられないことが考えられる。

そこで文字通りにも比喩にも理解できる両義的言語を材料にする。両義的言語はメタファーとしての理解に失敗しても、文字通りの理解が可能だろう。強迫者がどのようにメタファーをとらえるかを文脈状況を生成し記述させることによって検討していく。本来強迫者はメタファーのもつ両義性に耐えられないと考えられるので、両義的言語はより強迫者の特徴をより反映しやすい言語材料ではないとも考えられる。両義的言語は1人が文字通りの文脈も比喩的な文脈も両方考え付くことが予想される。しかし、関連性の原則に合う解釈は1つしかないといえ、必ずどれかが最初に思いつかれ、それがその人の解釈のための文脈になる(大浜,1995)。そこで提示された文脈

のないあいまいな状況において、強迫パーソナリティ者が最初に文字通りにとらえる文脈を生成しやすいのか比喩的にとらえる文脈を生成しやすいのかを検討する。

その際強迫傾向を測る指標としてはあいまい性耐性を用い大学生を対象にすることで、健常群の中に見られるあいまい性耐性の特徴から検討する。

## 方 法

**被験者** 大学生136名。平均年齢19.4歳。

**材 料** 両義的言語として「頭が痛い」と「〇〇は哲学者だ」を用いた。

「頭が痛い」は文字通り身体的不調に伴う身体的な痛みを表す場合と、精神的な悩みや問題の山積み状態に対して「痛い」という触覚的な属性を用いて心理状態を比喩的に表す場合がある。使い古され意味の固定した死喩に近いかもしれないが、日常生活の中で文字通りの身体的意味も比喩的な精神的意味も生きていると考えられる。研究1で用いた「AはBだ」という形式のメタファーとは異なる形式であるが、日常における多くの隠喩はAを伴わない形で現れることが多く、Aにあたる心理的状态を「頭が痛い」という身体的状態に例えていると考えられ、その意味では本来の隠喩に近い形式といえるかもしれない。また「頭が痛い」は心身両義的な言葉でもあり、強迫者が心身両義的なことばを比喩的にとらえることができることの重要性が言われており（北山,1988）、強迫者は心身両義的な言葉を文字通りに捉えてしまいやすことが予測される。

また心身両義的でないメタファーとして「〇〇は哲学者だ」を文脈次第で職業としての哲学者と比喩的に高尚な難しいことを考える人のどちらの意味にもとれるも材料として用いた。

質問紙は以下の内容で構成されていた。

I 「頭が痛い」についてその言葉がどのような場面で見られるかを具体的に想像し、想像できたらその場面を文章にして説明する。

II 「〇〇は哲学者だ」についてその言葉がどのような場面で使われるかを具体的に想像し、想像できたらその場面を文章にして説明する。その際〇〇には人称代名詞や固有名詞をあてはめる。なお被験者は文章作成において語尾を変えたり形容詞で修飾することは許された。

III 被験者が作った文章について確認する質問紙。

「頭が痛い」について、①身体的不調が原因である ②精神的な問題が原因である、および「〇〇は哲学者だ」について、①〇〇の職業は哲学者である ②〇〇の職業は哲学者ではない ③〇〇の特徴は哲学者の特徴によってたとえられている ④〇〇の職業は哲学者である。しかし作成した文章での「〇〇は哲学者だ」という表現は同時に〇〇の特徴が哲学者の特徴でたとえられている、

の中からそれぞれ選択することが求められた。

IV あいまい性耐性を測る質問紙。

今川（1981）によって作成された Ambiguity Tolerance Scale IV（以下 ATS IV とする）を用いた。ATS IV は44項目からなっており7件法で評定を行う。ATS IV は Norton 他を参照に項目が選択され信頼性と妥当性が検討されている（今川,1980;1982）。被験者は各項目について自分の印象や考えに最も近い答えを、7まったくちがう～1まったくその7件法で評定を行った。得点が低い程あいまい性耐性が低いことを示す。

**手続き** 質問紙は集団で行った。被験者はまず、両義的言語の質問紙に記入した後、被験者が作った文章について確認する質問紙に「はい」か「いいえ」に○をつけるように求められた。最後に ATS IV の質問紙に回答した。

## 結果と考察

欠損値のある被験者は分析単位で除外した。

予備分析として、あいまい性耐性の因子分析を行った。ATS IV はまったくそうを1点、まったくちがうを7点とし、逆転項目は逆転させた。別に調査した ATS IV の質問紙とあわせた欠損値のない282名を対象に行った。282名の ATS IV の得点の平均値は154.92 (SD=28.47) であった。相関の低い4項目を除外した後、主因子法バリマックス回転を加えた因子分析を行い、最終的に第1因子15項目、第2因子7項目を抽出した。両因子とも負荷量が.30以上であった第1因子の1項目を除き、第1因子を「あいまいな状況での不安（項目：自分の振舞いが人にどんな影響を与えるかわからないと不安になります、見ず知らずの人が私に対してどのように振舞うか予想がつかないととまどってしまいます、など）」第2因子を「あいまいさの拒否（項目：あいまいさのないわりきれる答えが期待できないような問題はしたくありません、複雑な問題はその全体が見とおせない限り魅力はありません、など）」と命名した。各因子ごとに $\alpha$ 係数を算出したところ、第1因子は $\alpha=.81$ 、第2因子は $\alpha=.69$ であった。

次に「頭が痛い」と「〇〇は哲学者だ」で作成された状況について、それぞれⅢの質問紙とてらしあわせ、文脈生成のパターンを文字通りと比喩的に分類した。「頭が痛い」については、2つの状況を生成した被験者3名については、関連性理論では最初に選んだ文脈が最も関連性の高い文脈であるという視点から最初に書かれてあるものを用いた。また身体的と精神的の両義的な文脈を生成した被験者6名は、人数が少ないため検定の際には除外した。「〇〇は哲学者だ」については、Ⅲの質問紙と対応させながら、〇〇が文字通り哲学者かどうかという基準をもとに分類し、③の両義的意味を持つかについ



Table 5  
あいまい性耐性因子各群における各状況生成を行った人数

	文脈生成	第1因子			第2因子		
		高群	中間群	低群	高群	中間群	低群
頭が痛い	文字通り	17 (17.9)	18 (16.3)	15 (15.9)	14 (18.0)	12 (14.4)	24 (17.6)
	比 喩	27 (26.1)	22 (23.7)	24 (23.1)	31 (27.0)	24 (21.6)	20 (26.4)
哲学者	文字通り	7 (7.6)	10 (7.6)	6 (7.8)	6 (8.4)	8 (7.4)	10 (8.2)
	比 喩	30 (29.4)	27 (29.4)	32 (30.2)	34 (31.6)	27 (27.6)	29 (30.8)

( )は期待値

ては今回は考えなかった。

心身両義的言語材料ごとの各因子群×状況生成の人数のクロス表を Table 5 に示した。

因子分析によって抽出した各因子ごとに、項目加算得点を得点が高い順に高群、中間群、低群の3群に分けた。そして各因子ごとに3（あいまい性因子得点：高群、中間群、低群）×2（文脈生成：文字通り、比喩的）の $\chi^2$ 検定を行った。

その結果「頭が痛い」は、第1因子では有意差は見られなかったが、第2因子において有意差が見られた（ $\chi^2(2) = 6.02, p < .05$ ）。残差分析の結果、低群では有意に「頭が痛い」を文字通りの文脈でとらえる人が期待値よりも多く、比喩的にとらえる人が少なかった。また「〇〇は哲学者だ」は、両因子とも有意差は見られなかった。

この結果は、あいまいさを拒否する傾向が強い人には「頭が痛い」を文字通りとらえる人が多いが、あいまいな状況に対して不安になる傾向が強い人にはその傾向が見られないということを示している。両義的言語を文字通りとらえるのにはあいまい性耐性の中でも、あいまいさを拒否する傾向が関連していると考えられる。両義的にとらえた被験者は人数が少なかったため統計上扱わなかったが、中間群が4人で高低群が各1人だった。吉川(1980)はあいまい性耐性が高すぎることの適応性の問題の可能性を指摘しており、人数が少ないため多くは言えないが、適度なあいまい性耐性を有する方がメタファーの両義的な意味を味わうことができるのかもしれない。

一方「〇〇は哲学者だ」は両因子とも有意差が見られなかった。「〇〇は哲学者だ」比喩的にとらえる人が多く、また使われる文脈を思い浮かばないという被験者が見られ、日常的に使わない言葉であり、比喩的な意味の方が固定しているために違いが見られなかったことが考えられる。

## 全体的考察

本研究では2つの観点から、メタファー理解における文脈生成能力のあり方を見てきた。1つは文脈生成能力がメタファー理解に及ぼす影響であり、2つめが強迫傾向がメタファー理解にどのような特徴を示すかということである。

研究1では、わかりにくいメタファーにおいて文脈生成の影響が強いことが示唆された。メタファーの理解が提示された文脈のみによって決定されるのであれば、このような理解の個人差を説明することはできない。また文脈が相互知識のような相互に知っている知識でなければいけないのであれば、文脈生成という手段によって選択された文脈が話し手にも共有されていると完全に確認することは困難であり、文脈生成によって理解の程度に差異が生じてくるということを説明することは困難だろう。

文脈生成能力が高いと、関連性を達成する文脈を選択しやすいということが考えられる。関連性を達成することによって、人は理解する（正確に言えば理解したと感ずる）ことができる。メタファーというあいまいな刺激に対してどの程度文脈を生成できるかの違いが、同じメタファー表現が同じ状況で提示されているのにも関わらず、理解に個人差が生じることにつながると考えられる。

研究2では、強迫パーソナリティ者のもつあいまい性非耐性の認知スタイルがメタファー理解に及ぼす影響を検討した結果、「あいまいさを拒否」する傾向が強い人は両義的表現を文字通りにとらえやすかった。

研究1でメタファーの理解を検討するとき単なる理解の可不可ではなく、関連性の達成の仕方という点から考えていくことが有効であることを示しており、関連性理論の観点から考えると、あいまいさを拒否する人は両義的言語にふれた時、文字通りにとらえる文脈を生成する

ことで関連性の達成を行いやすいという特徴を持っているのではないかと推測することができる。そのために文字通りに理解しやすい傾向が生じているのではないだろうか。

北山(1988)によると、特に強迫神経症者にとってあいまいはこなしたいけどこなせないものであり、打ち消しや知性化であいまいなものへのこだわりを処理しようとするが、この強迫的清算が不可能なあいまいさに取り囲まれる場合は激しい被害的な苦痛を味わうことになる。研究2で抽出した2因子のうち、「あいまいさの拒否」は打ち消しや知性化であいまいなものへのこだわりを処理しようとしている段階を反映し、「あいまいな状況での不安」はあいまいさに囲まれた苦痛の状態を反映した因子かもしれない。「あいまいさの拒否」の傾向が強いと、あいまいなものをわけて処理しようとするため両義的な言葉を、よりあいまいさを排除した文字通りにとらえる形で関連性の達成がされやすい。それであいまいさを処理できるという万能感を持っているため、強迫を自我異和的にとらえにくいのではないかと考えられる。

強迫者がメタファーを拒否する一方で、比喩的に語れるようになることが強迫を和らげる有効な手段であると言われている。それは何でも知的に割り切らないと気がすまない彼らにあいまい耐性を獲得させる役割を果たすからであり(渡辺,1992)、曖昧表現、両義的表現、比喩などは割り切れないものをおいておくための領域を言語的に指し示し、このような曖昧を生きることにより未消化物をこなして徐々にあいまい耐性を獲得していくのである(北山,1988)。この過程は、関連性の達成の特徴が変化していく過程であるともとらえられるかもしれない。この過程を明らかにしていき関連性の達成の仕方からあいまいさの理解についてアプローチしていくことが有効なのではないか。

しかし、今回用いた材料は全く文脈のないメタファーで人工的であり、それが実際に用いられている状況までも被験者が文脈生成しなけばならなかった。関連性理論では聞き手がそれに気づくかどうかに関わらず、話し手の意図が存在することが前提条件である。文脈情報を全く排除してしまった状態であったため、話し手は質問紙を作成した筆者でありそれを介して新たに話し手を想定し意図を汲み取れるかという二重の過程になっていた。実際場面で文脈生成能力、特に文脈状況生成能力が関連性の達成による理解の向上に役立つ場面として考えられるのは、2者間で話しているときは話し手である相手の発話に対して想像し関連性を達成する時。3者間では2人が話しているのを見て話し手の意図を想像して文脈生成し関連性を達成して理解をしやすくする場面などが考えられる。今回のような実験状況では、話し手の意図は薄くなり、関連性を達成しにくい状況だったと思われる。

また、強迫についてはあいまい性耐性の2因子を示し、多側面からあいまい性耐性を見ていくことが必要であろう。吉川(1980)は、Norton(1975)のあいまい性耐性尺度にあいまい性非耐性を測るものが多いため限定されていることを指摘している。採用された項目はすべてあいまい性非耐性の項目であったことから、あいまい性耐性と非耐性の違いも取り扱っていくことが必要であるだろう。

## 引用文献

- Blasco,D.G. & Briihl,D.S. 1997 Reading and recall of metaphorical sentences: Effect of familiarity and context. *Metaphor and Symbol*, 12, 261-285.
- Blasko,D.G. & Connine,C.M. 1993 Effect of familiarity and aptness on metaphor processing. *Journal of Experimental Psychology: Learning, Memory and Cognition*, 19, 295-308.
- Budner,S. 1962 Intolerance of Ambiguity as a personality variable. *Journal of personality*, 30, 29-50.
- 衛藤順子 1993 強迫神経症における Intolerance of Ambiguity (曖昧さに対する非耐性) 東北福祉大学研究紀要, 19, 155-164.
- Frenkel Brunswik,E. 1949 Intolerance of Ambiguity as an emotional and perceptual personality variable. *Journal of Personality*, 18, 108-143.
- Gildea,P. & Glucksberg,S. 1983 On understanding metaphor: The role of context. *Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior*, 22, 577-590.
- Grice,H.P. 1975 Logic and conversation. In P.Cole & J.L.Morgan(Eds.), *Syntax and semantics*. Vol.3. *Speech Act*. New York: Academic Press. Pp.41-58.
- Glucksberg,S. & Keysar,B. 1990 Understanding metaphorical comparisons: beyond similarity. *Psychological Review*, 97, 3-18.
- Glucksberg,S., McGlone,M.S., & Manfredi,D. 1997 Property attribution in metaphor comprehension. *Journal of Memory and Language*, 36, 50-67.
- 芳賀 純 1990 メタファーの定義と研究課題 芳賀純・子安増生(編) *メタファーの心理学* 誠信書房 Pp.3-32.
- 今川民雄 1980 Ambiguity Tolerance の研究 - ambivalent な場面での反応 - 日本心理学会第44回大会発表論文集, 500.
- 今川民雄 1981 Ambiguity Tolerance Scale の構成 (1) - 項目分析と信頼性について - 北海道教育大学紀要 第一部 C 教育科学編, 32, 79-93.
- 今川民雄 1982 AMBIGUITY TOLERANCE SCALE の妥

- 当性について 日本心理学会第46回大会発表論文集, 301.
- 北山 修 1992 心理臨床大辞典. Pp697.
- 北山 修 1988 心の消化と排出 文字通りの体験が比喻になる過程 創元社.
- 子安増生 1990 メタファー研究の方法 芳賀純・子安増生(編)メタファーの心理学 誠信書房 Pp.33-62.
- 楠見 孝 1985 比喻文における語句間の類似性—意味特徴の顕著性が比喻理解に及ぼす効果— 心理学研究, 56, 269-276.
- Norton,R.W. 1975 Measurement of Ambiguity Tolerance. *Journal of Personality Assessment*, 39, 607-619.
- 大浜るい子 1996 「ひとは発話をどう理解するか」—関連性理論が考える伝達行為— ドイツ文学論集, 29, 29-36.
- Ortony,A., Reynold,R., & Antos,S. 1978 Interpreting metaphor and idioms: Some effect of context on comprehension. *Journal of Memory and Language*, 24, 465-477.
- Salzman,L. 1968 The obsessive Personality, origins, dynamics, and therapy. New York: Jason Aronson. 成田善弘・笠原嘉訳 1985 強迫パーソナリティ みすず書房.
- Schiffer,S. 1972 *Meaning*. Clearendon Press, Oxford.
- Sperber,D. & Wilson,D. 1986 *Relevance: Communication and cognition*. Oxford: Basil Blackwell. 内田聖二・中達俊明・宋南先・田中圭子訳 1993 関連性理論—伝達と認知 研究社.
- 渡辺智英夫 1992 技法としての比喻 北山修(編)ことばの心理学 日常臨床語辞典 Pp.296-303.
- 吉川 茂 1980 Ambiguity Tolerance の程度と適応性 教育学科研究年報 第6号 Pp.35-39.